

天空の城ラピュタ

平岡 泰

領域代表 大阪大学大学院生命機能研究科 教授

天空の城ラピュタは宮崎駿アニメで有名だが、もともとはガリバー旅行記で科学者だけが住む墮落した島として描かれる。島の底には磁石が張られ、磁鉄鉱に富む地域の上に浮かぶ(なんと、超伝導電磁石による無重力をすでに実現していたとは)。その島の住民は、いつもうわの空で、時々頭をたたいて正気に戻さないとまともに歩くことも話すこともできない。ガリバー旅行記の作者ス威フトは司祭であり、宗教家から見た科学者というのは、なるほどそういうものらしい。

"バイキンマン"のすすめ

私が好まないのは、アンパンマン的な正義感である。それは、ただ無批判に社会正義の大義名分を振りかざすだけで、何も新しいものを生み出さない。それに引きかえ、バイキンマンは実に生産的である。欲しいものを手に入れるために工夫をこらし、困難を乗り越えるためのあらゆる方策を考える。それなのに、アンパンマンはいわれのない言いがかりをつけ、卑劣にも群衆を煽動してバイキンマンを責め立てる。アンパンマンは社会の理不尽の象徴である。バイキンマンは、望みを実現しようとしているだけで、それがたまたまその時代のその社会の流儀に合わないだけのことである。新しいものを生み出すには、閉塞したアンパンマンより、活力のあるバイキンマンのほうが有益である。バイキンマンは、社会の理不尽を背負いながら、社会のために今日も闘う。"デビルマン"のすすめも、ほぼ同義であるが、象徴する対立概念がやや複雑となる。

"なまけもの"のすすめ

禁欲的であることを、私は好まない。欲望のままに生きて、心に恥じるところのないのがよい。享楽は、高みへ向かう原動力である。本物のなまけものであれば、私は、"なまけもの"であれとは言わないが、どうも、日本人の多くは、勤勉かつ我慢強い。我慢強すぎる。何か不便なことがあっても、自分の労力であがなうことを厭わない。少し装置やプログラムを工夫することによって楽になる局面でも、楽をしようとする努力が足りない。楽をしようとすることが、罪悪であると思っているかのようである。同じ成果が得られるのであれば、短時間で効率よく仕事を終えるのがよい。余った時間で考えることができる。考え続けることが道を拓く。「3年寝太郎」という物語がある。その考え方続ける若者は、村人からは何もせずに寝続けているように見えたのであろう。楽をするための努力は、技術革新の種である。勤勉な "なまけもの"こそが、次の時代を拓いていく。おおいに勤勉になまけて、ブレークスルーを生み出していただきたい。